

保育者養成課程に在籍している学生の心理的特徴と子どもに関わる意識の検討

－大学生生活の過ごし方のタイプ別による検討－

金子 泰之

キーワード / 保育, 大学生生活の過ごし方, 学校適応

問題と目的

高い専門性を持つ保育者が求められるようになってきている中で、保育者を希望する学生のパーソナリティ特性や保育を希望した動機（大村，2011）など、保育者をめざす学生の特徴が明らかにされている。保育者の専門性を発揮する場は、幼稚園・保育園から福祉施設まで幅広い。子育てのフォローだけでなく、発達障害や虐待などのケースとも向き合わなければならず、保育者への期待や社会から要請されるものは大きい。質の高い保育者を育成していくためにも、保育者をめざす学生の資質や特徴を様々な視点から明らかにしていく必要がある。

都筑・早川・村井・早川・金子（2011）、都筑・早川・村井・早川・金子（2012）、は、大学生生活の過ごし方の質問項目（溝上，2009）を使い、大学生生活の時間の使い方から大学生の心理的特徴を明らかにしてきた。都筑・早川・村井・早川・金子・永井・梁（2013）は、大学生生活の過ごし方のタイプとして6つのタイプを抽出している。そして、6つのタイプを比較しながら大学生が社会に移行していく上で求められるハーディネスや目標意識を検討している。大学生生活の中心をインターネット・マンガ・ゲームなどに置くヴァーチャル活動群は、ハーディネスや時間管理能力が低かったことを明らかにしている。一方で、対人交際を中心に学生生活を送っている対人活動中心群は、ハーディネスだけでなく、自己効力や将来への希望も高いことが明らかとなっている。そして、大学での学業のような正課教育だけでなく、それ以外のサークル活動など対人的活動を通して大学生は社会に必要な能力を獲得していくと結論づけている。大学生の成長にとって学業だけでなく、正課外教育や準正課教育と呼ばれるものも重要性であることを示唆している。しかし、4年制の総合大学に通う学生を対象としたものであるため、保育者養成課程に在籍している学生の実態に当てはまらない部分もあると考えられる。

保育者養成課程においては、一般的な4年制大学と違い、保育に関する資格を取得することが第一に求められる。特に、短大のような2年制の場合、短期間で資格を取得しなければならず、過密な時間割での学びが求められる。保育者をめざし、高いモチベーションと目標を持ち、充実した学校生活を過ごさなければ資格取得や卒業が難しくなる。さらに、2年で卒業し保育の現場に入っていく上で、即戦力となるような力も学生には求められる。例えば、上記のハーディネスや目標意識、心理的に自立し自分で考えて行動できる主体性である。

本研究では、保育者をめざす学生の実態を大学生生活の過ごし方から明らかにするにあたり、3つの領域に注目する。1つ目は、保育者に必要と考えられる資質（心理的自立、ハーディネス、目標意識）、2つ目は、大学生生活への適応（大学生生活充実感、私語など授業への取り組み）、

3つ目は、子どもに関わる保育者としての意識（保育者志望動機，保育者効力感）である。そして，都筑ら（2013）が4年制大学の学生を対象として検討したように，大学生活の過ごし方のタイプと時間の過ごし方の満足度によって，保育者に必要な資質，大学生活への適応，子どもに関わる保育者としての意識の3領域がどのように異なるのかを検討することを目的とする。

方法

調査協力者と手続き

東海地方にある短期大学部保育科の1年生に調査を実施した。217名中，213名（男性7名，女性206名）からの回答を得た。平均年齢は，18歳6ヶ月であった。

住まいの内訳は，自宅からの通学は189名，アパートや寮など自宅外からの通学は23名，不明は1名であった。

サークル・クラブ活動の内訳は，体育系クラブは72名，文化系クラブは9名，体育系クラブと文化系クラブの両方に所属しているのが1名，所属していないのが131名であった。

短期大学への志望順位は，第1志望の進学先と答えたのが197名，第1志望の進学先ではないと答えたのが16名であった。

後期の授業が開始した2013年9月，第1回目の授業中にアンケートを実施した。

調査内容

大学生活の過ごし方 大学生活の過ごし方尺度（溝上，2009），17項目を用いた。大学の授業，クラブ・サークル活動，異性・同性の友達との交際，テレビをみるなどの項目から構成されていた。1週間に費やす時間数を，（1）全然ない，（2）1時間未満，（3）1～2時間，（4）3～5時間，（5）6～10時間，（6）11～15時間，（7）16～20時間，（8）21時間以上の8段階評定で回答を求めた。

時間の使い方の満足度 日頃の時間の使い方に関する満足度を聞く質問項目（Benesse教育開発センター，2009）を用いた。あなたの日頃の時間の使い方は，100点満点で，だいたい何点くらいだと思いますか？という教示のもと，0点から100点までの11段階で回答を求めた。

心理的自立 5つの下位尺度（自我の確立，情緒的なコントロール，自己決定と責任，人生への積極的態度，個別性の未確立）から構成される青年の心理的自立に関する項目（山田，2011）のうち，各因子に負荷量の高かった上位3項目，計15項目を用いた。自我の確立（物事に対し，自分の意見をはっきり主張できる），情緒的なコントロール（喜びや怒り，悲しみなどの感情をコントロールすることができる），自己決定と責任（困難な問題に遭遇しても，できるだけ自分で解決しようとする），人生への積極的態度（自分の人生を自分で切り開いている），個別性の未確立（誰かと一緒にいないと落ち着かない）などの項目から構成されていた。今のあなた自身にどれくらい当てはまりますか？という教示のもと，全く当てはまらない（1点）から非常に当てはまる（5点）の5件法で回答を求めた。

ハーディネス 大学生用ハーディネス尺度（森・東條・鈴木，2005）のうち，各因子に負荷量の高かった上位3項目，計9項目を用いた。チャレンジ（これからの展開がどうなるか分からない方が面白いと思う），コントロール（思いがけないことが起こったときにも臨機応変に対応できる），コミットメント（一生懸命やれば目標に到達できると思う）などの項目

から構成されていた。あなた自身にどれぐらい当てはまりますか？という教示のもと、全く当てはまらない（1点）から非常に当てはまる（5点）までの5件法で回答を求めた。

目標意識 青年期の目標意識尺度（都筑，1999）のうち、将来への希望，時間管理，計画性の3つの下位尺度の20項目を用いた。今のあなた自身の考え方や感情にどれぐらい当てはまりますか？という教示のもと、全くそう思わない（1点）からとてもそう思う（5点）の5件法で回答を求めた。

大学生生活充実感 4つの下位尺度（フィット感，交友満足，学業満足，不安）から構成される大学生の学校生活に対する充実感に関する項目（奥田・川上・坂田・佐久田，2010）のうち、各因子に負荷量の高かった上位3項目，計12項目を用いた。フィット感（大学では積極的に取り組めるものがある），交友満足（学内の友人関係に満足している），学業満足（学びたいことが大学で学べている），不安（これからの大学生活の先が見えず不安である）などの項目から構成されていた。あなた自身にどれぐらい当てはまりますか？という教示のもと、全く当てはまらない（1点）から非常に当てはまる（5点）の5件法で回答を求めた。

私語の経験 2つの下位尺度（講義内容に関係のある私語，講義内容に関係のない私語）から構成される大学生の授業中の私語に関する項目（出口・吉田，2005），計7項目を用いた。講義内容に関係のある私語（授業の内容に関する疑問点について話した），講義内容に関係のない私語（授業には関係のない冗談や笑い話をした）などの項目から構成されていた。短大・大学に入学してから以下のことをどれぐらいしたことがありますか？という教示のもと、ぜんぜんない（0点）から何度もある（3点）の4件法で回答を求めた。

保育者志望動機 5つの下位尺度（憧れ，適性，やりがい，無目的同調，専門職志向）から構成される保育者を志望する動機に関する項目（長谷部，2006）のうち、各因子に負荷量の高かった上位3項目，計15項目を用いた。憧れ（幼稚園教諭・保育士にあこがれて），適性（子どもと関わる仕事をしたいから），やりがい（幼稚園・保育園での体験学習の経験から），無目的同調（他に適当な職業がないから），専門職志向（一生続けることのできる職業だから）などの項目から構成されていた。あなたが保育者を志望するのはなぜですか？という教示のもと、全く当てはまらない（1点）から非常に当てはまる（5点）の5件法で回答を求めた。

保育者効力感 保育者効力感に関する項目（三木・桜井，1998）のうち、負荷量の高かった上位4項目を用いた。“私は、1人1人の子どもに適切な遊びの指導や援助を行えると思う”，“私は、子どもの状態が不安定な時にも、適切な対応ができると思う”などの項目から構成されていた。あなたが保育士や幼稚園教諭として働くとしたら、次に書かれている文章は、あなた自身にどれぐらい当てはまりますか？という教示のもと、全く当てはまらない（1点）から非常に当てはまる（5点）の5件法で回答を求めた。

結果

1. 大学生生活の過ごし方のタイプ分けと時間の使い方の満足度の群分け

大学生生活の過ごし方については、都筑ら（2013）の結果を参考に、4因子構造（授業外の自主的勉強，対人交際，インターネット・マンガ・ゲーム，大学の授業・勉強）として解釈し得点を算出した。

次に、大学生生活の過ごし方のタイプを明らかにするため、授業外の自主的勉強，対人交際，インターネット・マンガ・ゲーム，大学の授業・勉強の計4つを投入変数（Ward法，平方

ユークリッド距離)として扱い、クラスター分析を行った。いくつかのクラスターを抽出し、各クラスターに分類される配点の特徴、人数などを考慮しながら最適と思われる5つのクラスターに分類した結果を採用した。5つのクラスターごとに大学生生活の過ごし方の4下位尺度(授業外の自主的勉強、対人交際、インターネット・マンガ・ゲーム、大学の授業・勉強)のzスコアを図1-1に示した。

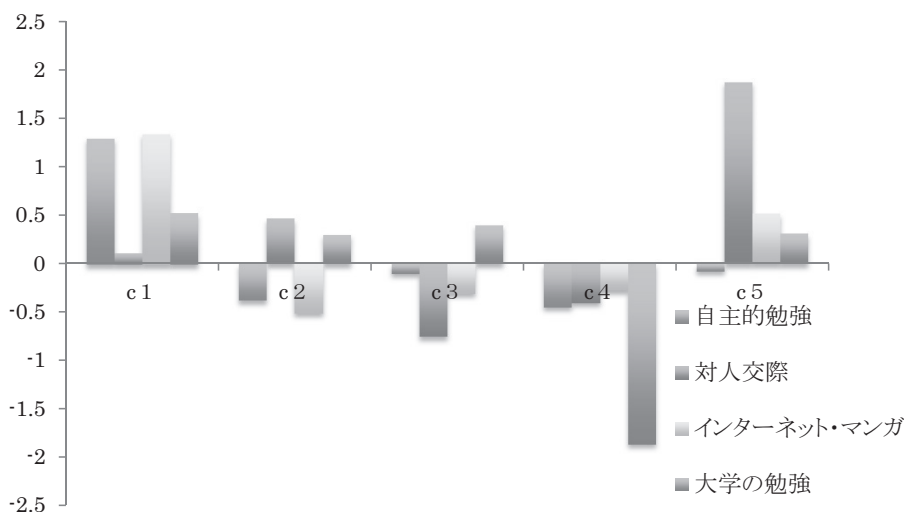


図 1-1 大学生生活の過ごし方のタイプ (z スコア)

クラスター 1 (33 名) は、対人交際はほぼ平均に近いが、4 つの大学生生活の過ごし方すべてが平均以上である。5 つのクラスターの中では、全体的な活動量の多い群と考えられるため、高活動群と名付けた。

クラスター 2 (41 名) は、授業外の自主的勉強とインターネット・マンガ・ゲームは平均より低い、対人交際と大学の授業・勉強が多い群である。大学に通い授業に熱心に参加し、友達関係も充実している群と考えられるため、大学生生活満喫群と名付けた。

クラスター 3 (68 名) は、大学の授業・勉強のみが多い群である。それ以外の、授業外の自主的勉強、対人交際、インターネット・マンガ・ゲームは平均より少なく、対人交際が顕著に少ない群である。大学に来て授業には出席しているが、それ以外の活動に対して消極的であるため、授業出席勉強群と名付けた。

クラスター 4 (33 名) は、4 つの大学生生活の過ごし方すべてが平均以下の群である。5 つのクラスターの中では、全体的な活動量の少ない群と考えられるため、低活動群と名付けた。

クラスター 5 (24 名) は、対人交際、インターネット・マンガ・ゲーム、大学の授業・勉強の 3 つが平均より多い群である。その中でも、対人交際が顕著に多い群であるため、対人交際群と名付けた。

時間の使い方の満足度について、中央値 (60 点) をもとに群分けを行った。顕著な差をみるために、中央値の 60 点は除外し、0 点から 50 点を満足度低群、70 点から 100 点を満足度高群とした。満足度低群は 86 名、満足度高群は 74 名であった。

2. 大学生生活の過ごし方のタイプと心理的自立の関係

大学生生活の過ごし方によって心理的自立にどのような違いがあるのかを検討するため、大学生生活の過ごし方のタイプ(5)と時間の使い方の満足度(2)を独立変数、心理的自立の5つの下位尺度(“自我の確立”, “情緒的なコントロール”, “自己決定と責任”, “人生への積極的態度”, “個性の未確立”)を従属変数とし、2要因の分散分析を行った。

表2-1に、大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度別の自我の確立得点を示した。自我の確立については、大学生生活の過ごし方のタイプの主効果($F(4,140)=2.02, n.s.$), 時間の使い方の満足度($F(1,140)=2.72, n.s.$), 交互作用($F(4,140)=1.27, n.s.$), であり、有意な差は見られなかった。

表2-1 大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度における自我の確立得点

	高活動群		大学生生活満足群		授業出席勉強群		低活動群		対人交際群		計	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
時間満足低群	3.27	0.62	3.31	0.72	3.01	0.76	3.27	0.97	3.20	0.51	3.16	0.77
時間満足高群	3.67	0.75	3.59	1.02	3.22	0.66	2.86	0.69	3.94	0.71	3.50	0.85
計	3.49	0.71	3.48	0.91	3.09	0.73	3.15	0.90	3.73	0.73	3.32	0.82

表2-2に、大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度別の情緒的なコントロール得点を示した。情緒的なコントロールについては、大学生生活の過ごし方のタイプの主効果($F(4,139)=0.65, n.s.$), 時間の使い方の満足度($F(1,139)=2.69, n.s.$), 交互作用($F(4,139)=1.39, n.s.$), であり、有意な差は見られなかった。

表2-2 大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度における情緒的なコントロール得点

	高活動群		大学生生活満足群		授業出席勉強群		低活動群		対人交際群		計	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
時間満足低群	3.27	0.72	3.62	0.64	3.52	0.65	3.59	0.95	3.13	1.35	3.49	0.78
時間満足高群	3.46	0.81	3.70	0.74	3.69	0.75	3.33	0.72	4.12	0.70	3.68	0.76
計	3.38	0.76	3.67	0.70	3.58	0.68	3.51	0.88	3.81	1.02	3.58	0.77

表2-3に、大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度別の自己決定と責任得点を示した。自己決定と責任については、大学生生活の過ごし方のタイプの主効果($F(4,139)=1.05, n.s.$), 時間の使い方の満足度($F(1,139)=2.90, n.s.$), 交互作用($F(4,139)=0.83, n.s.$), であり、有意な差は見られなかった。

表2-3 大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度における自己決定と責任得点

	高活動群		大学生生活満足群		授業出席勉強群		低活動群		対人交際群		計	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
時間満足低群	3.73	0.68	3.26	0.65	3.43	0.64	3.18	0.57	3.67	0.78	3.40	0.65
時間満足高群	3.82	0.65	3.75	0.54	3.59	0.60	3.62	0.76	3.53	0.89	3.67	0.65
計	3.78	0.65	3.56	0.62	3.49	0.63	3.31	0.64	3.57	0.84	3.53	0.66

表2-4に、大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度別の人生への積極的態度得点を示した。人生への積極的態度については、大学生生活の過ごし方のタイプの主効果($F(4,140)=1.09, n.s.$), 時間の使い方の満足度($F(1,140)=17.19, p<.01$), 交互作用($F(4,140)=0.33, n.s.$), であり、時間の使い方の満足度において主効果が有意であった。時間の使い方満足度低群(3.01)よりも時間の使い方満足度高群(3.55)の得点が高かった。

表 2-4 大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度における人生への積極的態度得点

	高活動群		大学生生活満喫群		授業出席勉強群		低活動群		対人交際群		計	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
時間満足低群	2.80	0.61	2.95	0.64	3.14	0.67	2.92	0.83	3.07	0.76	3.01	0.69
時間満足高群	3.54	0.70	3.49	0.72	3.65	0.55	3.19	0.47	3.72	0.95	3.55	0.70
計	3.22	0.75	3.28	0.73	3.32	0.67	3.00	0.74	3.53	0.93	3.27	0.74

表 2-5 に、大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度別の個別性の未確立得点を示した。個別性の未確立については、大学生生活の過ごし方のタイプの主効果 ($F(4,139) = 0.25, n.s.$)、時間の使い方の満足度 ($F(1,140) = 0.20, n.s.$)、交互作用 ($F(4,139) = 0.58, n.s.$)、であり、有意な差は見られなかった。

表 2-5 大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度における個別性の未確立得点

	高活動群		大学生生活満喫群		授業出席勉強群		低活動群		対人交際群		計	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
時間満足低群	2.37	1.23	2.48	1.07	2.48	0.83	2.57	1.10	2.07	0.64	2.46	0.97
時間満足高群	2.23	0.95	2.60	0.76	2.46	0.64	2.33	1.20	2.72	0.91	2.49	0.84
計	2.29	1.06	2.55	0.89	2.48	0.76	2.50	1.11	2.53	0.87	2.47	0.91

以上より、大学生生活の過ごし方のタイプの違いによって、心理的自立に違いは見られなかった。

3. 大学生生活の過ごし方のタイプとハーディネス

大学生生活の過ごし方によってハーディネスにどのような違いがあるのかを検討するため、大学生生活の過ごし方のタイプ (5) と時間の使い方の満足度 (2) を独立変数、ハーディネスの3つの下位尺度 (“チャレンジ”, “コントロール”, “コミットメント”) を従属変数とし、2要因の分散分析を行った。

表 3-1 に、大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度別のチャレンジ得点を示した。チャレンジについては、大学生生活の過ごし方のタイプの主効果 ($F(4,141) = 0.34, n.s.$)、時間の使い方の満足度 ($F(1,141) = 3.59, n.s.$)、交互作用 ($F(4,141) = 0.35, n.s.$)、であり、有意な差は見られなかった。

表 3-1 大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度におけるチャレンジ得点

	高活動群		大学生生活満喫群		授業出席勉強群		低活動群		対人交際群		計	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
時間満足低群	2.63	0.81	3.17	0.96	2.77	0.86	3.04	0.99	2.93	0.89	2.89	0.90
時間満足高群	3.31	1.11	3.25	1.02	3.20	0.95	3.24	1.21	3.28	1.25	3.25	1.05
計	3.01	1.03	3.22	0.98	2.92	0.91	3.09	1.03	3.18	1.14	3.06	0.99

表 3-2 に、大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度別のコントロール得点を示した。コントロールについては、大学生生活の過ごし方のタイプの主効果 ($F(4,141) = 3.06, p < .05$)、時間の使い方の満足度 ($F(1,141) = 7.66, p < .01$)、交互作用 ($F(4,141) = 1.44, n.s.$)、であり、大学生生活の過ごし方のタイプの主効果と時間の使い方の満足度の主効果が有意であった。

多重比較 (Tukey 法) の結果、低活動群 (2.59) よりも大学生生活満喫群 (3.23) の得点が高かった。さらに、時間の使い方の満足度低群 (2.73) よりも時間の使い方の満足度高群 (3.14) の得点が高かった。

表 3-2 大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度におけるコントロール得点

	高活動群		大学生生活満喫群		授業出席勉強群		低活動群		対人交際群		計	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
時間満足低群	2.67	0.85	3.14	0.58	2.69	0.66	2.63	0.80	2.40	0.89	2.73	0.73
時間満足高群	3.28	0.43	3.29	0.66	3.06	0.79	2.48	0.50	3.22	0.80	3.14	0.70
計	3.01	0.70	3.23	0.63	2.82	0.72	2.59	0.72	2.98	0.89	2.92	0.74

表 3-3 に、大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度別のコミットメント得点を示した。コミットメントについては、大学生生活の過ごし方のタイプの主効果 ($F(4,141) = 0.89, n.s.$)、時間の使い方の満足度 ($F(1,141) = 5.88, p < .05$)、交互作用 ($F(4,141) = 0.82, n.s.$)、であり、時間の使い方の満足度の主効果が有意であった。時間の使い方の満足度低群 (3.93) よりも時間の使い方の満足度高群 (4.31) の得点が高かった。

表 3-3 大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度におけるコミットメント得点

	高活動群		大学生生活満喫群		授業出席勉強群		低活動群		対人交際群		計	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
時間満足低群	3.90	0.88	4.10	0.91	3.92	0.70	3.74	1.11	4.33	0.71	3.93	0.86
時間満足高群	4.36	0.62	4.06	0.58	4.44	0.56	4.24	0.57	4.56	0.50	4.31	0.58
計	4.16	0.76	4.08	0.72	4.10	0.70	3.88	1.00	4.49	0.55	4.11	0.76

以上より、大学生生活満喫群は、思いがけないことがおきても臨機応変に対応できるというコントロールが高いことが明らかとなった。

4. 大学生生活の過ごし方のタイプと目標意識

大学生生活の過ごし方によって目標意識にどのような違いがあるのかを検討するため、大学生生活の過ごし方のタイプ (5) と時間の使い方の満足度 (2) を独立変数とし、目標意識の 3 つの下位尺度 (“将来への希望”, “時間管理”, “計画性”) を従属変数とし、2 要因の分散分析を行った。

表 4-1 に、大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度別の将来への希望得点を示した。将来への希望については、大学生生活の過ごし方のタイプの主効果 ($F(4,140) = 2.01, n.s.$)、時間の使い方の満足度 ($F(1,140) = 9.63, p < .01$)、交互作用 ($F(4,140) = 0.95, n.s.$)、であり、時間の使い方の満足度の主効果が有意であった。時間の使い方の満足度低群 (2.82) よりも時間の使い方の満足度高群 (3.17) の得点が高かった。

表 4-1 大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度における将来への希望得点

	高活動群		大学生生活満喫群		授業出席勉強群		低活動群		対人交際群		計	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
時間満足低群	2.57	0.81	2.91	0.57	2.97	0.57	2.57	0.70	2.88	0.78	2.82	0.65
時間満足高群	3.35	0.37	3.10	0.53	3.26	0.46	2.74	0.52	3.23	0.93	3.17	0.59
計	3.01	0.70	3.02	0.55	3.07	0.55	2.62	0.65	3.13	0.88	2.98	0.65

表 4-2 に、大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度別の時間管理得点を示した。時間管理については、大学生生活の過ごし方のタイプの主効果 ($F(4,141) = 0.97, n.s.$)、時間の使い方の満足度 ($F(1,141) = 11.13, p < .01$)、交互作用 ($F(4,141) = 0.63, n.s.$)、であり、時間の使い方の満足度の主効果が有意であった。時間の使い方の満足度低群 (2.52) よりも時間の使い方の満足度高群 (3.00) の得点が高かった。

表 4-2 大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度における時間管理得点

	高活動群		大学生生活満喫群		授業出席勉強群		低活動群		対人交際群		計	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
時間満足低群	2.64	0.62	2.54	0.64	2.53	0.51	2.44	0.69	2.48	0.23	2.52	0.57
時間満足高群	3.00	0.79	2.93	0.67	3.19	0.70	2.57	0.84	3.07	1.03	3.00	0.78
計	2.84	0.73	2.78	0.68	2.76	0.66	2.48	0.72	2.89	0.91	2.75	0.72

表 4-3 に、大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度別の計画性得点を示した。計画性については、大学生生活の過ごし方のタイプの主効果 ($F(4,141) = 2.40, n.s.$)、時間の使い方の満足度 ($F(1,141) = 3.80, p < .01$)、交互作用 ($F(4,141) = 0.73, n.s.$)、であり、有意な差は見られなかった。

表 4-3 大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度における計画性得点

	高活動群		大学生生活満喫群		授業出席勉強群		低活動群		対人交際群		計	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
時間満足低群	3.10	0.92	3.39	0.80	3.07	0.78	3.50	0.75	3.20	0.79	3.24	0.80
時間満足高群	2.77	0.73	2.73	0.58	2.72	0.73	3.49	0.64	3.17	0.94	2.88	0.75
計	2.91	0.82	2.99	0.74	2.95	0.78	3.50	0.71	3.18	0.87	3.07	0.79

以上より、大学生生活の過ごし方のタイプの違いによって、目標意識に顕著な違いは見られなかった。

5. 大学生生活の過ごし方のタイプと大学生生活充実感

大学生生活の過ごし方によって大学生生活充実感にどのような違いがあるのかを検討するため、大学生生活の過ごし方のタイプ (5) と時間の使い方の満足度 (2) を独立変数、大学生生活充実感の 4 つの下位尺度 (“フィット感”, “交友満足”, “学業満足”, “不安”) を従属変数とし、2 要因の分散分析を行った。

表 5-1 に、大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度別のフィット感得点を示した。フィット感については、大学生生活の過ごし方のタイプの主効果 ($F(4,140) = 1.92, n.s.$)、時間の使い方の満足度 ($F(1,140) = 2.65, n.s.$)、交互作用 ($F(4,140) = 2.75, p < .05$)、であり、大学生生活の過ごし方のタイプ×時間の使い方の満足度の交互作用が有意であった。

交互作用が見られたため、単純主効果検定を行った。時間満足高群において大学生生活の過ごし方のタイプの主効果 ($F(4,140) = 2.81, p < .05$) と、大学生生活満喫群において時間の使い方の満足度の主効果 ($F(1,140) = 9.09, p < .01$) が有意であった。

時間の使い方の満足度高群において、低活動群 (3.17) より授業出席勉強群 (4.04) の得点が高かった。また、時間満足高群において、低活動群 (3.17) より大学生生活満喫群 (4.06) の得点が高かった。

大学生生活満喫群において、時間の使い方の満足度低群 (3.40) より大学生生活満喫群における時間の使い方の満足度高群 (4.06) の得点が高かった。

時間の使い方に満足している群であっても、大学生生活の過ごし方のタイプによって大学生生活へのフィット感に違いがあることが明らかとなった。授業出席勉強群と大学生生活満喫群は、低活動群よりもフィット感が高く、大学生生活で積極的に取り組めるものがあると感じていた。一方、低活動群は大学生生活へのフィット感が低く、大学生生活に対して消極的な態度であることが明らかとなった。

さらに、大学生生活満足度であっても、時間の使い方の満足度の高低によって大学生生活へのフィット感に違いがあることが明らかとなった。大学生生活満足度の中で、時間の使い方に満足している群はフィット感が高く、大学生生活で積極的に取り組めるものがあると感じていることが明らかとなった。

表 5-1 大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度におけるフィット感得点

	高活動群		大学生生活満足群		授業出席勉強群		低活動群		対人交際群		計	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
時間満足低群	3.57	0.72	3.40	0.66	3.58	0.59	3.67	0.67	3.93	0.43	3.59	0.63
時間満足高群	3.79	0.66	4.06	0.60	4.04	0.57	3.17	0.69	4.06	0.74	3.93	0.67
計	3.70	0.68	3.80	0.70	3.74	0.62	3.54	0.69	4.02	0.65	3.75	0.67

表 5-2 に、大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度別の交友満足得点を示した。交友満足については、大学生生活の過ごし方のタイプの主効果 ($F(4,140) = 2.46, p < .05$)、時間の使い方の満足度 ($F(1,140) = 5.48, p < .05$)、交互作用 ($F(4,140) = 0.54, n.s.$)、であり、大学生生活の過ごし方のタイプの主効果と、時間の使い方の満足度の主効果が有意であった。

多重比較 (Tukey 法) の結果、低活動群 (3.96) よりも大学生生活満足群 (4.51) の得点が高かった。また、時間の使い方の満足度低群 (4.11) よりも時間の使い方の満足度高群 (4.50) の得点が高かった。

大学生生活満足群は、大学生生活における友人と楽しい時間を共有できており、友人関係への満足度が高いことが明らかとなった。

表 5-2 大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度における交友満足得点

	高活動群		大学生生活満足群		授業出席勉強群		低活動群		対人交際群		計	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
時間満足低群	4.00	0.75	4.43	0.48	4.07	0.64	3.94	0.97	4.33	0.58	4.11	0.72
時間満足高群	4.41	0.60	4.57	0.66	4.55	0.50	4.00	0.90	4.69	0.36	4.50	0.61
計	4.23	0.68	4.51	0.59	4.23	0.64	3.96	0.93	4.59	0.45	4.29	0.70

表 5-3 に、大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度別の学業満足得点を示した。学業満足については、大学生生活の過ごし方のタイプの主効果 ($F(4,141) = 0.80, n.s.$)、時間の使い方の満足度 ($F(1,140) = 3.12, n.s.$)、交互作用 ($F(4,141) = 0.65, n.s.$)、であり、有意差は見られなかった。

表 5-3 大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度における学業満足得点

	高活動群		大学生生活満足群		授業出席勉強群		低活動群		対人交際群		計	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
時間満足低群	4.10	0.45	3.79	0.52	4.02	0.53	4.04	0.64	4.07	0.60	4.00	0.54
時間満足高群	4.36	0.46	4.21	0.65	4.28	0.66	3.95	0.59	4.17	0.66	4.22	0.61
計	4.25	0.46	4.04	0.63	4.11	0.58	4.01	0.61	4.14	0.62	4.10	0.58

表 5-4 に、大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度別の不安得点を示した。生活の過ごし方のタイプの主効果 ($F(4,141) = 0.48, n.s.$)、時間の使い方の満足度 ($F(1,140) = 3.37, n.s.$)、交互作用 ($F(4,141) = 1.74, n.s.$)、であり、有意差は見られなかった。

表 5-4 大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度における不安得点

	高活動群		大学生生活満喫群		授業出席勉強群		低活動群		対人交際群		計	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
時間満足低群	3.57	0.57	3.45	0.97	3.05	0.88	3.83	0.99	3.27	0.64	3.38	0.92
時間満足高群	3.00	0.54	3.06	0.66	3.31	0.78	3.14	1.10	3.22	0.96	3.15	0.77
計	3.25	0.61	3.22	0.81	3.14	0.85	3.64	1.05	3.24	0.86	3.27	0.85

以上より、授業出席勉強群と大学生生活満喫群は大学生生活の充実度が高いことが分かった。特に、大学生生活満喫群は、大学生生活と友人関係が充実しており、大学生生活が充実している群であることが明らかとなった。

6. 大学生生活の過ごし方のタイプと授業中の私語

大学生生活の過ごし方によって授業中の私語にどのような違いがあるのかを検討するため、大学生生活の過ごし方のタイプ (5) と時間の使い方の満足度 (2) を独立変数、私語の経験の 2 つの下位尺度 (「講義内容に関係のある私語」, 「講義内容に関係のない私語」) を従属変数とし、2 要因の分散分析を行った。

表 6-1 に、大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度別の講義内容に関係のある私語得点を示した。講義内容に関係のある私語については、大学生生活の過ごし方のタイプの主効果 ($F(4,139) = 3.36, p < .05$), 時間の使い方の満足度 ($F(1,139) = 0.09, n.s.$), 交互作用 ($F(4,139) = 1.15, n.s.$), であり、大学生生活の過ごし方のタイプの主効果が有意であった。

多重比較 (Tukey 法) の結果、低活動群 (1.82) よりも対人交際群 (2.53) の得点が高かった。

表 6-1 大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度における講義内容に関係のある私語得点

	高活動群		大学生生活満喫群		授業出席勉強群		低活動群		対人交際群		計	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
時間満足低群	2.23	0.77	2.30	0.65	2.11	0.66	1.99	0.69	2.35	0.34	2.15	0.66
時間満足高群	2.31	0.53	2.20	0.74	2.24	0.63	1.43	1.05	2.61	0.39	2.22	0.72
計	2.27	0.63	2.24	0.70	2.16	0.65	1.82	0.83	2.53	0.39	2.18	0.69

表 6-2 に、大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度別の講義内容に関係のない私語得点を示した。講義内容に関係のない私語については、大学生生活の過ごし方のタイプの主効果 ($F(4,139) = 2.61, p < .05$), 時間の使い方の満足度 ($F(1,139) = 2.20, n.s.$), 交互作用 ($F(4,139) = 0.10, n.s.$), であり、大学生生活の過ごし方のタイプの主効果が有意であった。

多重比較 (Tukey 法) の結果、授業出席勉強群 (1.69) よりも低活動群 (2.18) の得点が高かった。

表 6-2 大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度における講義内容に関係のない私語得点

	高活動群		大学生生活満喫群		授業出席勉強群		低活動群		対人交際群		計	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
時間満足低群	1.80	1.02	2.14	0.55	1.77	0.64	2.20	0.55	2.07	0.60	1.95	0.68
時間満足高群	1.64	0.83	1.86	0.72	1.56	0.67	2.14	0.60	1.83	0.63	1.77	0.71
計	1.71	0.90	1.97	0.66	1.69	0.65	2.18	0.56	1.90	0.61	1.86	0.70

以上より、講義に関する私語については対人交際群の経験頻度が高いことが明らかとなった。一方、講義に関係のない私語については、低活動群が高いことが明らかとなった。

7. 大学生生活の過ごし方のタイプと保育者志望動機

大学生生活の過ごし方によって保育者志望動機にどのような違いがあるのかを検討するため、大学生生活の過ごし方のタイプ(5)と時間の使い方の満足度(2)を独立変数、保育者志望動機の5つの下位尺度(“憧れ”, “適性”, “保育のやりがい”, “無目的同調”, “専門職志向”)を従属変数とし、2要因の分散分析を行った。

表7-1に、大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度別の憧れ得点を示した。憧れについては、大学生生活の過ごし方のタイプの主効果($F(4,141)=0.57, n.s.$)、時間の使い方の満足度($F(1,139)=0.78, n.s.$)、交互作用($F(4,139)=0.74, n.s.$)、であり、有意な差は見られなかった。

表7-1 大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度における憧れ得点

	高活動群		大学生生活満足群		授業出席勉強群		低活動群		対人交際群		計	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
時間満足低群	3.80	0.88	3.71	0.85	3.94	0.82	3.96	1.06	4.00	0.53	3.89	0.86
時間満足高群	3.90	0.64	4.08	0.66	3.72	0.79	4.05	0.73	4.33	0.77	4.00	0.73
計	3.86	0.74	3.93	0.75	3.86	0.81	3.99	0.96	4.24	0.70	3.94	0.80

表7-2に、大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度別の適性得点を示した。適性については、大学生生活の過ごし方のタイプの主効果($F(4,141)=0.22, n.s.$)、時間の使い方の満足度($F(1,141)=0.01, n.s.$)、交互作用($F(4,141)=1.33, n.s.$)、であり、有意な差は見られなかった。

表7-2 大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度における適性得点

	高活動群		大学生生活満足群		授業出席勉強群		低活動群		対人交際群		計	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
時間満足低群	4.50	0.77	4.45	0.48	4.61	0.50	4.70	0.38	4.87	0.18	4.60	0.50
時間満足高群	4.69	0.55	4.76	0.34	4.57	0.42	4.57	0.57	4.58	0.68	4.65	0.49
計	4.61	0.65	4.64	0.42	4.59	0.47	4.67	0.43	4.67	0.59	4.63	0.49

表7-3に、大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度別の保育のやりがい得点を示した。保育のやりがいについては、大学生生活の過ごし方のタイプの主効果($F(4,141)=0.36, n.s.$)、時間の使い方の満足度($F(1,141)=0.01, n.s.$)、交互作用($F(4,141)=0.62, n.s.$)、であり、有意な差は見られなかった。

表7-3 大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度における保育のやりがい得点

	高活動群		大学生生活満足群		授業出席勉強群		低活動群		対人交際群		計	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
時間満足低群	3.77	0.88	3.88	0.74	3.95	0.69	3.93	0.82	4.20	0.84	3.93	0.75
時間満足高群	4.18	0.59	3.70	0.80	3.85	0.91	4.00	0.67	3.92	1.19	3.89	0.85
計	4.00	0.74	3.77	0.77	3.92	0.77	3.95	0.77	4.00	1.08	3.91	0.80

表7-4に、大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度別の無目的同調得点を示した。無目的同調については、大学生生活の過ごし方のタイプの主効果($F(4,141)=2.01, n.s.$)、時間の使い方の満足度($F(1,141)=5.77, p<.05$)、交互作用($F(4,141)=0.22, n.s.$)、であり、時間の使い方の満足度の主効果が見られた。時間の使い方満足度高群(1.81)よりも時間の使い方の満足度低群(2.21)の得点が高かった。

表 7-4 大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度における無目的同調得点

	高活動群		大学生生活満喫群		授業出席勉強群		低活動群		対人交際群		計	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
時間満足低群	2.20	0.93	2.21	0.96	2.09	0.72	2.48	0.96	2.07	0.43	2.21	0.83
時間満足高群	1.90	0.61	1.90	0.94	1.61	0.46	2.33	1.22	1.53	0.44	1.81	0.76
計	2.03	0.76	2.03	0.94	1.92	0.68	2.44	1.01	1.69	0.49	2.02	0.82

表 7-5 に、大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度別の専門職志向得点を示した。専門職志向については、大学生生活の過ごし方のタイプの主効果 ($F(4,141) = 1.15, n.s.$)、時間の使い方の満足度 ($F(1,141) = 0.91, n.s.$)、交互作用 ($F(4,141) = 1.85, n.s.$)、であり、有意な差は見られなかった。

表 7-5 大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度における専門職志向得点

	高活動群		大学生生活満喫群		授業出席勉強群		低活動群		対人交際群		計	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
時間満足低群	3.53	0.59	3.02	0.44	2.92	0.73	3.15	0.65	2.53	1.12	3.04	0.70
時間満足高群	3.08	0.72	3.08	0.59	3.31	0.63	3.19	0.47	3.11	1.04	3.15	0.69
計	3.28	0.69	3.06	0.53	3.06	0.71	3.16	0.59	2.94	1.06	3.09	0.70

以上より、大学生生活の過ごし方のタイプの違いによって、保育者志望動機に顕著な違いは見られなかった。

8. 大学生生活の過ごし方のタイプと保育者効力感

大学生生活の過ごし方によって保育者効力感にどのような違いがあるのかを検討するため、大学生生活の過ごし方のタイプ (5) と時間の使い方の満足度 (2) を独立変数、保育者効力感を従属変数とし、2 要因の分散分析を行った。

表 8-1 に、大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度別の保育者効力感得点を示した。保育者効力感については、大学生生活の過ごし方のタイプの主効果 ($F(4,141) = 0.09, n.s.$)、時間の使い方の満足度 ($F(1,141) = 13.09, p < .01$)、交互作用 ($F(4,141) = 2.19, p < .10$)、であった。時間の使い方の満足度の主効果が有意であり、大学生生活の過ごし方×時間の使い方の満足度の交互作用が有意傾向であった。

交互作用が見られたため、単純主効果検定を行った。対人交際群において時間の使い方の満足度の主効果 ($F(1,141) = 11.88, p < .01$) が有意であった。

対人交際群における時間の使い方の満足度低群 (2.65) より時間の使い方の満足度低群 (3.69) の得点が高かった。

表 8-1 大学生生活の過ごし方と時間の使い方の満足度における保育者効力感得点

	高活動群		大学生生活満喫群		授業出席勉強群		低活動群		対人交際群		計	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
時間満足低群	3.10	0.41	3.20	0.45	3.15	0.60	3.00	0.77	2.65	1.17	3.09	0.64
時間満足高群	3.38	0.32	3.30	0.57	3.24	0.47	3.39	0.24	3.69	0.41	3.37	0.47
計	3.26	0.38	3.26	0.52	3.18	0.56	3.11	0.68	3.38	0.83	3.22	0.58

以上より、対人交際群の中でも時間の使い方に満足していない群の保育者効力感は低いことが明らかとなった。

考察

本研究では、保育者養成課程に学ぶ学生の実態を心理学的に明らかにするにあたり、以下の3領域に注目した。1つ目は、保育者に必要と考えられる資質（心理的自立、ハーディネス、目標意識）、2つ目は、大学生活への適応（大学生生活充実感、授業への取り組み）、3つ目は、子どもに関わる保育者としての意識（保育者志望動機、保育者効力感）であった。そして、大学生生活の過ごし方のタイプと時間の過ごし方の満足度によって、上述した3つがどのように異なるのかを検討した。

まず、大学生生活の過ごし方のタイプとしては、高活動群、大学生生活満喫群、授業出席勉強群、低活動群、対人交際群の5つがあることが明らかにされた。都筑ら（2013）では、インターネット・マンガ・ゲームだけが顕著に高いヴァーチャル活動群が抽出されていたが、本調査においてはヴァーチャル活動群に似た傾向を示す群のみ抽出されなかった。本調査が対象としたのは2年制の短期大学保育科に在籍している学生であり、4年制大学の学生を対象とした調査と違い女性の比率が圧倒的に高いなど対象者に偏りがあることが理由として考えられる。

この5つの群の中で、特徴的なのは大学生生活満喫群と低活動群であった。大学生生活満喫群は、思いがけないことが起きても臨機応変に対応できるといったコントロールが高かった。都筑ら（2013）の結果においては、対人関係が充実している群や大学での勉強に打ち込んでいる群はコントロールが高いことが明らかになっている。大学生生活満喫群は自分自身の力で困難な状況を切り開くことができると感じている群であるため、就職活動のようなストレスフルな状況も乗り越えていけるタイプと考えられる。さらに、大学生生活満喫群は、大学生生活充実感のうち、大学生活へのフィット感が高かった。今回、調査を実施した保育科の学生は、短期間で保育に関する資格取得が求められる。時間割は1限から4限までがほとんど埋まっており、4年制大学の学生と比べ短大で過ごす時間が相対的に長くなる。保育に関する勉強と学内での友人関係をバランスよく充実させることが学校適応を促進していくことにつながるのだろう。

さらに、大学生生活満喫群であっても、時間の使い方の満足度の高低によって大学生活へのフィット感に違いがあることが明らかとなった。大学生生活満喫群の中でも、時間の使い方に満足している場合はフィット感が高く、より大学生活で積極的に取り組めるものがあると感じていることが明らかとなった。大学生生活の過ごし方のタイプは、行動レベルで学生がどんな生活を過ごしているのか、時間配分を通して大学生生活の内容を反映している。それに対し、時間の過ごし方の満足度は、どんな時間を過ごしているのか大学生生活の質的な面を反映する。大学生活でどんな活動に打ち込んでいるか、その活動内容だけでなく、学生自身が満足した時間を過ごせているか、質の高い時間を過ごすことも重要であると言える。

一方、低活動群は大学生活へのフィット感が低く、大学生活に対して消極的な態度であることが明らかとなった。また、講義に関係する私語の経験頻度は、対人交際群が高かったが、講義に関係のない私語の経験頻度は、低活動群が高かった。低活動群は、大学生活に対して積極的に参加しておらず、講義に集中して取り組めていない群と考えられる。本調査が対象とした保育科の学生は、2年間で保育士と幼稚園教諭の両方の資格取得をめざしている。調査協力者213名中、低活動群は33名であり、およそ15%の学生には、大学生活や学業面のこと、資格取得や卒業に向けて何らかの配慮が必要と考えられる。

対人交際群においては、時間の過ごし方の満足感の高低によって、子どもに関わる意識に違いが見られた。時間の過ごし方に満足していない対人交際群は、保育者効力感が低かった。対人交際群の中には、積極的に人と関わろうとするタイプと、同調的に人と関わり、うわべだけのつきあいをするタイプがいると考えられる。表面的に人とつきあっている群は、心理的適応や学校適応が低いことが指摘されている（石本・久川・齊藤・上長・則定・日潟・守口，2009）。表面的には交友関係に満足しているように見えても、自信のなさや自尊心の低さなどを抱えているタイプが対人交際群に含まれていると考えられる。

今後は、1年次の大学生活の過ごし方が、2年次にどのような影響を与えるのか、大学生生活の過ごし方のタイプを縦断的に調査し、在学中の大学生の成長や発達について検討することを今後の課題としたい。

引用文献

- Benesse 教育研究開発センター 2009 放課後の生活時間調査報告書—小・中・高校生を対象に— 研究所報, vol.55.
- 出口拓彦・吉田俊和 2005 大学の授業における私語の頻度と規範意識・個人特性との関連：大学生活への適応という観点からの検討 社会心理学研究, 21, 2, 160-169.
- 長谷部比呂美 2006 保育者をめざす学生の志望動機と資質能力の自己評価 淑徳短期大学研究紀要 45, 115-130.
- 石本雄真・久川真帆・齊藤誠一・上長 然・則定百合子・日潟淳子・森口竜平 2009 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連
- 三木知子・桜井茂男 1998 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響 教育心理学研究, 46, 203-211.
- 溝上慎一 2009 「大学生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討 —正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す— 京都大学高等教育研究, 15, 107-118.
- 森真依子・東條光彦・佐々木和義 2005 ストレスに強い人格特性について—大学生用ハーディネス尺度の作成— 発達心理臨床研究 11, 91-95.
- 奥田亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子 2013 大学1回生から4回生までの横断および縦断データから見た大学生活充実度の推移 大阪樟蔭女子大学紀要, 9, 1-14.
- 大村 壮 2011 短期大学保育系学生の志望動機資質について：入学直後の調査 常葉学園短期大学紀要, 42, 121-130.
- 都筑学 1999 大学生の時間的展望 —構造モデルの心理学的検討— 中央大学出版部
- 都筑学・早川宏子・村井剛・早川みどり・金子泰之 2011 大学生活の過ごし方のタイプとその心理的特徴についての検討 中央大学保健体育研究所紀要, 29, 7-33.
- 都筑学・早川宏子・村井剛・早川みどり・金子泰之 2012 大学生活の過ごし方のタイプとその心理的特徴についての検討(2) 中央大学保健体育研究所紀要, 30, 1-33.
- 都筑学・早川宏子・村井剛・早川みどり・金子泰之・永井曉行・梁晋衡 2013 大学生活の過ごし方のタイプとその心理的特徴についての検討(3) 中央大学保健体育研究所紀要, 31, 1-34.
- 山田裕子 2011 大学生の心理的自立の要因ならびに適応との関連 青年心理学研究, 23, 1-18.